

---

# 失くし者

左藤 宗多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

失くし者

### 【Zコード】

Z3325BA

### 【作者名】

左藤 宗多

### 【あらすじ】

立島博哉は冬休みも終わり大学に向かう途中、己の不注意で交通事故に遭った。相手の信号無視で交通事故に遭った。一つは夢、もう一つは夢の中の夢だった。だが、正夢を見る博哉はなんとかしてその二つの現実を回避するが…？

## 1話（前書き）

処女作。

超稚拙な文章でもOKな方どうぞ。

新年が明けたばかりのまだ肌寒い季節。

少年から青年へと顔つきを変貌させたばかりと見える男が、自宅から浮かない表情で外に出た。

「初っぱなからそんな元気なくてビーッすんの。シャキッとした、シヤキッ」と

「最初の登校日はこんなもんでしょ。授業あるし」

「頑張つてよー。サボらなこよひにな」

男の後ろにいた女性は男の背中に喝を叩き込んだ。それを平然と受け入れた男は小さなため息を吐き、眼鏡の位置を矯正し、ポケットから取り出した鍵を自転車の鍵穴に差し込み解錠する。籠に放り込んでおいた手袋をはめ、覆い隠されていた口を出すとここまでマスクを下げた。

「といひで母さん。小学生じゃないんだ。外まで見送る事ないでしょ。帰つてこない訳ないんだし」

「気にすんなよ」

右手を一回お辞儀をせ、誤魔化し笑う。いつもの調子に撒かれた男は特に反応するでもなく自転車に跨がった。そのところ、そして気にしてるという訳でもなさそうだ。

「そんじゃま、いつてきまーす」

「いつてらつしゃい」

「次に会つときは病院のベッドの上だ」

マスクを被つて、ペダルをこぎながらす男の背後で母親は息子の迷言に苦笑する。

見送りを終えた母親は家に戻り居間のソファーアに座る。ちょうど朝のニュース番組恒例の星座占いが始まるところだ。

ところで彼女は占いが好きだ。どれくらい好きかといふと恋愛相談で「貴女と彼つて相性いいんじゃない?」「ホント!?'やつた!」と無邪気にはしゃぐ程に好んでいる。占いの結果で朝のテンションが左右されるなんて人もいることだらう。彼女はまさにそれであった。

「一位か…」

「あたし七位つて微妙だなあ〜」

その親にしてその子あり。寝癖も直さずパジャマのまま朝食にありついている子供達が結果を知り思ひ思ひに呟いた。

彼等を尻目に自身が一位であると、掌で膝に氣合いを入れ立ち上がる。

(良いことあつたら今夜はカレーね)

だが、冷蔵庫を開くとどうだらう。カレーを作るには材料が乏しい。嫌々ながらも買い物に出掛ける決意をした母親。夕飯のカレーは確定らしい。

気温が低ければ寒い。

風が冷たければなお寒い。

いくら防寒具を纏おうが、風は服を通り抜けて鳥肌を立たせる。だが、軽快に自転車をこいでいけば体温は次第に上昇するもので、何時の間にか額にほんの少し汗も浮かんできていた。

坂を下り、勢いづけて一気に坂を上ると息が荒れる。イヤホンから流れる音楽を口ずさみながら上れば誰だって多少はそうなるだろう。運転中のイヤホンは法律違反だが、朝っぱらから警官も補導してきたりしないだろう、と思っている為に敢えて無視していた。実際、正面から警官が向かってきて心音が高鳴った事もあるが、一声も掛けられないますれ違うくらいだ。気にしなくなつても致し方ない。

男は空を見上げる。青々とした色に清々しさを感じ、一瞬だけ目を閉じた。イヤホンと耳の隙間に侵入する風が空気を切り裂く。火照った身体に冷たい風が心地良い。身体の芯に伝わる感覚に浸り目を開く。

そして、男は狼狽する。事態は曇つた眼鏡でもハッキリと認識できた。

横断歩道に飛び出した我が身。

灯つたままの赤信号。

視界の隅っこに映るトラックは接触するかしないかの距離。

止まらないならスピードを上げる乗り切る。瞬時に弾き出した答えだ。

だが、まあ結果は良くなかった。寧ろ限りなく悪かつた。

男に与えられた行動は刮目する時間だけで、衝突を済ませた身体は宙を舞い、地面に叩きつけられ転がり、やがて動かなくなつた。

## 1話（後書き）

短いですね。

長文書くの得意じゃないんで仕方ないんです。  
物足りない文章だけど、その辺は妥協してくれると有難いです（  
人）

今朝、非常に夢見が悪いが為、寝不足気味に陥つた男 立島博哉 は母親の見送りを嫌々ながら許可し、現在、大学へ向かう途中にあつた。

使い古した緑色の自転車に跨つた彼が力強くペダルを漕ぐたびに、鍵につけた鈴が鳴る。冷たい風が吹き付けるが、彼の額にはとっくに汗が浮かんでいた。いくら寒かるうが、自転車に乗る彼にとっては毎度の事である。

だが、何時もと違う点が一つだけある。それこそ耳につけるイヤホンだ。今日に限つてどうしてつけないのか。理由はあった。忘れた訳ではない。ちゃんとバッグの中に結んで入れてある。知つてゐ上で彼は耳に装着することを拒否した。

聞く人が聞いたら笑うはずだ。十人に訊ねたら笑うか、適当に受け流すか、無視をするであろう理由。寝不足の原因でもある今朝見た夢にあつた。

妙にリアルな夢だつた。実体験したかのように博哉を死と向かい合せたのだ。

青信号でトラックの運転手からすれば何事もなく通過するはずだった横断歩道。そこに信号無視をした一台の自転車。トラックは平常運転のまま自転車と、それに乗つていた人を跳ね飛ばした。

飛んで、叩きつけられ、跳ねて、転がり、停止。

車は急に止まれない。ブレーキをかけたトラックが眼前に迫りくる恐怖の中、博哉の夢はそこで終わつた。

(夢ならいい。自分は死んでいない。何もなかつた。だから坂を上つているんじゃないか。ただの夢だ。所詮、夢なんてものは勝手に

思い描いた、空想、幻、絵空事の塊なんだから）

自分を必死に誤魔化す博哉。それでも不安と恐怖は拭えなかつた。博哉が見た夢は”現実”だった。正確にいうなら夢。そうではなく、夢の中で受けた痛みがリアルに感じた。それ故に彼は夢を夢として片づけてしまいたくなかったのだ。

それともう一つだけ。彼の見た夢は今まで一度たりともハズれた事はない。ゲームや漫画のキャラクターが出てきたとか、宇宙人が眼前に現れたとか、そんなものは別として、彼の経験上、現実感あふれる夢にてきたモノその全てが現実となるのである。正夢とでも言おう。

だが、博哉はその夢を今まで一度として有効活用してきた事例はない。なにせ夢は起床した瞬間には忘却しているもので、残つたものは僅かだ。まさに夢の欠片。

現実化したモノは知っていたとしても、自分に利益として書き換える事なんて出来ない内容だった。

だが、今回ばかりは違う。博哉は自信を持つていた。今朝見た夢の覚えている内容は赤信号で渡つたのが原因で轢かれた。完全に博哉の不注意が招いた悲劇だ。ならば改善する点は、信号の手前でストップして、信号機が青に変わるのを待つて渡るだけの話ではないか。

（俺が交通事故で死ななくても良い未来。あんなもの一度は御免だからな）

本当なら、死ぬなら交通事故で人生終えるのが良い、とか吹聴していたが、一度リアルに経験したせいで、今はそんな思いもなくなつていた。それなら死んではいいんだ、と訊かれた時はどうするのか。博哉は胸を張つて答えるだろう。

「YES」と。

結果、博哉は死んだ。人間の最期。だが、博哉が最も望まない形で成了た。

考えていた通り、赤信号が点灯しているタイミングで横断歩道の手前で停止した。平常運転で通り過ぎるトラック。

（あれに間違いない。ナンバープレートの数字も夢と一致。これで俺のせいで不幸な運転手だった奴は問題なく生きていける）

そして、俺も。

博哉が安堵しきつたのと同時に甲高いエンジン音が轟いた。青信号に点灯した信号機を見て、ペダルを踏み込んでいた博哉は、音の発生源を視界にいれ、ぞつとして、気づいた時には宙を舞っていた。周りの悲鳴と共に高く高く、遠く遠くまで飛んだ博哉は地面に横たわり、自身から流れる血を見てしまった。

（やっぱ紅いんだな。……道路交通法は守りつけよ）

その直後、事切れてしまった。

## 2話（後書き）

また死んでしまいました。  
といつわけで take3へ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3325ba/>

---

失くし者

2012年1月8日19時01分発行